

「源泉探求」から「哲学」へ

初期ニーチェの文献学と哲学についての一考察

東谷 優希(一橋大学大学院博士後期課程)

古典文献学者としてのニーチェは、哲学研究者の側からも古典学研究者の側からも、長らく等閑に付されてきた。その端緒は周知の通り、『悲劇の誕生』の出版(1872)に求められる。この著作に対する学界の明白な黙殺と、ニーチェの文献学者としての資質に対して為された否定的な裁定は、後の世代まで多大なる影響を及ぼし、また、ニーチェが正式に文献学者であったのは若い時期であったという事情も手伝って、古典文献学者ニーチェは哲学的にも文献学的にも「未熟」である、という評価が形成されてきたのであった。近年ではニーチェの文献学的な業績が正当に評価され、その学者としての資質と、後年の古典研究に与えた影響は概ね認められているとはいえ、とりわけわが国の哲学研究の分野では、事態が大きく変わったとは言い難い。

しばしば散見されるニーチェの文献学に対する数々の否定的な言明、何より『悲劇の誕生』に於ける、凡そ実証性というものを排した(それゆえまた「事実」誤認に満ちた、と評される)その叙述方法もまた、ニーチェは文献学を捨てることによって哲学者となった、と判断するに十分な証拠であるように見做されてきた。しかし、かかる見解の帰結として得られるのは、ニーチェを哲学の立場に閉じ込め、その学問批判を彼の哲学の付随物として軽く捉える安易な解釈か、更には、ニーチェは学問というものを総じて謂わば功利的観点で評すべきと主張した、という誤った解釈でしかないだろう。24歳という若さでバーゼル大学に招聘された新進気鋭の文献学者が世に問うた処女作が、もはや専門分野の既成の枠組みに収まるものではなかったという極めて異様な事態については、改めて考察してみる必要があるように思われる。後年のニーチェが明確に述べる通り、『悲劇の誕生』という哲学的著作が書かれた動機が「学問そのもの」に対する問題意識に貫かれていたとすれば、ニーチェに於ける文献学と哲学との断絶ではなく、寧ろその連続性こそが認められなければならない。つまり、ニーチェは文献学に内在し続けたからこそ文献学に「哲学」を要請せざるを得なかったのである。本研究の目的は、ニーチェが文献学に見出した問題点を捉え、以て彼の言う「哲学」を浮き彫りにすることにある。

それゆえ考察に当っては、ニーチェの文献学的営為を検討することに主眼が置かれねばならない。その際、公刊された文献学的著作のうちその約半分を占めることから、また、彼の文献学者としての地位を確立させたという事情からも、ディオゲネス・ラエルティオスという名のもとに伝わる著作に関する一連の論考、すなわち「ディオゲネス・ラエルティオスの源泉資料について」(1868/69)、「ラエルティオス関連文書拾遺余録」(1870)、「ディオゲネス・ラエルティオス源泉資料及び本文批判への寄与」(1870)を対象とするのが最適であるだろう。これらの論考に於いてニーチェが行った研究の水準の高さについては、現在では専門家によって概ね承認されており、それだけに『悲劇の誕生』との対照が際立つのである。

様々な矛盾を孕んで論理的一貫性を欠き、意味の通らない記述が散見されるばかりでなく、全体を埋め尽くしている数々の引用でさえその境界が曖昧であることで知られるディオゲネス・ラエルティオスの著作に対し、かかる問題点を一挙に解決すべくニーチェが採用したのは、伝承された現存する作品を、そのの

元となった様々な源泉資料へと解体し、資料内の相互関係を確定し、他方で散逸してしまった原資料の再構成を行うという、文献学のなかでも高度で専門的な技法、すなわち「源泉探求 Quellenforschung」であった。いわゆる「ホメロス問題」を提起したF.A.ヴォルフ以来、文献学に留まらず、19世紀ドイツの学問上の主流となっていたこの正統的方法論に則り、ニーチェはディオゲネス・ラエルティオスの分析と総合を試みる。ラエルティオスはディオクレスの要約に過ぎない、という根本テーゼを軸に、演繹的にこの主張を立証していく様は——その推論に対して多様な疑義を差し挟むことが可能であるとはいえ——ニーチェがいわゆる「言語の文献学者 Sprachphilolog」として、当時の文献学に対していかに忠実であったのかを物語っているだろう。

そしてこのことはまた、一連の論考に於けるニーチェが、当時の文献学が基礎としていた諸前提を共有している、ということを示している。これらの論考で展開されているニーチェの議論に隠されている前提としては、少なくとも三点を指摘することができよう。まず、過去に対する素朴な実在論である。すなわち、自らの主観的な操作とは独立に、客観的事実としての確たる過去が存在し、学問的な方法論によってこの起源に到達することが可能である、という信念である。また、「源泉探求」に於けるこの学問的方法論は、「本文批判 Textkritik」に於ける「校合 recensio」との類似によって捉えられている。例えばニーチェが固持している「怠惰の原理」は、このことを示しているだろう。さらには、この類似に伴う論理的帰結として、因果法則性への信奉が挙げられる。これらの諸前提をもとに、厳密な文献学的操作に基づけば確たる認識に到達することが可能である、というのが、当時の文献学の基礎観念であった。

しかしその一方で、ディオゲネス・ラエルティオスに取り組むニーチェには既に、かかる学問上の基礎観念への信奉に対する懐疑が生まれていた。遺稿群が明らかにしているように、ディオゲネス・ラエルティオスに関する一連の論考は実のところ、完成した著作というよりも寧ろ、つねに仮説に留まる過渡的なノートという性格を色濃く有している。「源泉探求」が確固たる起源の獲得に到達することなく、そこでの結論は結局のところ仮説的な憶測に留まらざるを得ないという洞察に、つまり、文献学の一つの基幹を成す方法論がいかに恣意的で脆弱な基礎のうえに成り立っているのかという洞察に、ニーチェは身を以て逢着していた。論考執筆の最中に為されたバーゼル大学の就任講演「ホメロスの人格について」(1869)は、そのことの証左である。講演で「分析派」に言い渡した否認宣告は、「ホメロス問題」を主題にして語られた「源泉探求」に対するニーチェの挑戦に他ならない。その意味で、就任講演は「一個の自己批判の試み」であったと言える。そして文献学の「哲学」化の要請で講演が締め括られているということは、少なくともこの時期のニーチェの言う「哲学」が、文献学者としての反省の所産として、文献学的方法論の批判的反転として、生じたものであることを示唆している。

かくしてニーチェの思索は、過去に対する「事実」の探求から「概念」の探求へと移行し、それはやがて『悲劇の誕生』へと結実していく。とは言えこの移行は、決して「学問そのもの」の否定を意味するのではない。そうではなく、上述した基礎観念を無自覚に信奉し続ける学問上の態度に対する批判の表明なのである。ニーチェの「哲学」という言葉に、何が一人の古典文献学者をして『悲劇の誕生』の如き著作を書かしたのか、その謎を説く鍵があるだろう。以上が、本発表の要旨である。